



# ひびびびでない

## 老人問題

広島市民リポーター 本多 新悦 (餌釣)

現在の日本では、老後のために、貯蓄を余儀なくされているのではないだろうか？

日本人の貯蓄率の高さは、老後の保障が十分でないため、個人の方でなんとかしなくてはならないという不安の表れだとも思っています。たとえ貯金がゼロであっても、まじめに働いて年金を積み立てていけばある程度の生活ができ、安心して老後が過ごせるような社会だったらどんなにか安心でしょう。そういう社会なら、税金が少々高くなってもかまわないと考えるのは私だけでしょうか。私は今年厄年を迎えて、老後のことを考えるようになりました。老人福祉はどうなっているのか、その現状について知りたいと思い、福祉事務所を訪ねました。

### 福祉サービスと

### 老人ホーム

大館市では、市の登録ヘルパー十九人と社会福祉協議会のヘルパー十五人が、五十人の在

宅寝たきり老人に入浴サービスを、六十三人の在宅老人に家事の援助や相談・助言などの福祉サービスを執行っており、民間の福祉施設に委託している分も合わせると、二百三十人の高齢者にホームヘルパーが派遣されているそうです。このほかに、市内には寝たきり老人や痴呆性老人が二百人以上いて、家族が家庭で介護を続けているとのことでした。九月末現在で、養護老人ホームへは三十四人、特別養護老人ホームへは七十八人が入所の申し込みをしていて、入所を待っているそうです。

このように多くの老人が入所申し込みをしている老人ホームとはどのような施設なのか知りたくて、大館市で唯一の養護老人ホーム「成章園」を訪ねてみました。養護老人ホームとは、六十五歳以上の、主にひとり暮らしの人で、身体、精神、環境または経済的な理由により自宅での生活が困難な人が入所する施設で、ねたきりなど、身体に障害のある人が入る特別養護老



人ホームと区別されています。「成章園」は収容人員が八十人で、四十七の居室のほかに、ゲートボール場、ガラス温室、運動場があり、日本でも数少ない温泉付きの養護老人ホームです。「ここは、隣に労災病院があるので非常に心強いんです。しかし、入所者が亡くなったり、自立できなくなると特別養護老人ホームへ移る時はやりきれない気持ちになります。六十歳代から九十歳代までの入所者がい

ますが、年々、入所者の平均年齢が高くなってきていますから、早く特別養護老人ホームと一体化した施設になればよいと思っています」と島山所長さんは話してくれました。

「成章園」には昔の養老院の暗いイメージは無く、ホテル並みのりっぱな建物で、入所者の皆さんは快適に、そして元気に生活していました。家族の訪問や外泊も自由ですが、家族の人がほとんど訪れない入所者もいるそうです。いろいろな事情があるのでしょうか、ちよつと寂しい思いがしました。

### 出生率の低下は 高い教育費のため？

厚生省の推計によると、日本は西暦二〇〇〇年ころには、四人に一人が六十五歳以上という高齢化社会になるそうです。高齢化社会というのは、若年層との比較の問題ですから、旧西ドイツを除くと出生率が世界最低の日本は、このままでいけば、四人に一人ではなく、三人に一人が高齢者という社会になるかもしれません。

私は、出生率の低下に拍車を掛けているのは、高い教育費にも原因があるのではないかと考えます。現在、一人の子供を育てるのに約一千万円の教育費が

かかるそうです。社会の高齢化率を引き下げていくためには、子供を産み・育てやすい社会でなければなりません。そのためには教育を社会的に保障することも大事なことだと思います。

### 自分の老後は だれがみる

「私の老後は自分の子供にみてもらいます。そのかわり税金を安くしてほしい。うちの子供が他人のことまで面倒を見る必要はない」と考えている人もいます。その背景には、お金をかけて教育した子供に、老後の面倒をもらうのは当然だという考えがあります。しかし、このような考えの人ばかりでは、日本の老人福祉は進みません。そういう意味でも、福祉に対する考え方を直していく必要があるのではないのでしょうか。

福祉はただではないのです。福祉には負担が伴うのです。私は、税金(負担)は高くてもいいから、老後の準備を公的に進めてほしいと思います。そして、老人問題は地方行政でできる範囲から着手することが必要だと考えます。

老人問題は、いつの日か必ず自分の身にふりかかる問題なのですから。